

「日記故事」の現存刊本及びその出版の背景について

橋本草子

一 はじめに

「日記故事」は、元の至元二十八年（一二九一）に建安の虞韶によって編纂された「小学日記」（一）をもととして、明代に盛んに出版された蒙学書である。題名の由来は、楊億の「少年の学問は単なる記憶や暗誦だけではなく、その良知・良能を養わなければならないがそれには先入の言が大切である。日々、故事を覚えさせる。その故事は今昔に拘わらない。必ずまず孝弟・忠信・礼儀・廉恥などの徳性を養う故事、たとえば黄香扇枕、陸績懷橘、叔敖陰徳、子路負米などを世俗の物語のようにわかりやすく教えれば、道理を理解するであろう。これを久しくやっていると、無理なく自然にその徳性が出来上がるのである。」（二）という言葉である。徳目ごとに分類された百字前後の教訓的故事が刊本により異なるが百から三百ほど収められており、これらの故事を児童に日々記憶させることによつて道德的な人格陶冶をめざしたものである。明末には巻頭に「全相二十四孝詩選」を合わせた形で盛んに出版され日本にも多くの刊本が渡来しており、和

刻本もいくつか出版されている。

筆者はこれまで「二十四孝詩選」の刊本を調査するために「日記故事」刊本を調査してきた（三）がその過程で「日記故事」自体も明代の出版状況を明らかにする上で興味深い研究対象であることに気が付いた。近年、大澤顯浩氏によつてフランスとドイツに所蔵される刊本の書影がもたらされたこともあり、今回は前稿以後に新たに管見に入つた刊本もふくめて「日記故事」の現存するテキストの一覧を提示し、あらためてそれら相互の關係を考えるとともに、明代に「日記故事」が盛んに出版された背景についても考察してみたいと思う。

二 現存する「日記故事」刊本

このリストでは公的機関に所蔵されている、または公刊されているものだけを挙げ、個人の所蔵するもの（四）は省いている。また和刻本は、その原本が問題になるものに限りとりあげた。配列順序は甲乙丙丁の各項目内で原本の刊行年の推定できるものを年代順にならべ、刊行年不明のものをその

後に置くのを原則とした。なお、書名は最初の巻の初めに記されたものを取るのを原則としたが、所蔵機関によつては目錄に載せられている書名を用いたものもある。

(甲) 巻首に二十四孝の付かないもの。

(甲1) 『新刊大字分類校正日記大全』九卷二冊

〔北京国家図書館蔵 (16565)〕

〔影印本 『中国古代版画叢刊』2所収〕

嘉靖二十一年(一五四二) 熊大木刻本

建安草廬虞詡以成纂集、書林繁後學熊大木校註。

卷頭に嘉靖二十一年 熊大木序あり。

卷末に「壬寅年重加校正整新刊梓行」の木記。上図下文每半葉一圖、図の上部に四字題。図の両側に二行ずつに分けて七言詩を付す。

収録する故事および分類を次の(甲2)と比較してみると出入があり、異なつた版であることがわかる。版の傷みが激しく、巻二の後半部、巻五の最終葉、巻九の莊敬類「斂板復奏」以降、巻十の大半、などが欠けている。熊大木は出版業者としてよりも「大宋中興通俗演義」「南北兩宋志伝」などの英雄伝奇小説の作者として知られている(5)。

この書の巻四には Lucille Chia (6) の指摘するように「済人沈困」と題して熊氏第一九世の熊宗立とその子及び孫の「一清が医術と医学書の出版によつて人々を救つた功績を讃える話が収められている。実は(甲2)(甲3)をはじめとする他の多くのテキストでは巻二に建陽熊氏の

二世の祖である唐代の熊褒をめぐる孝感の奇蹟の逸話が「感天雨銭」その他の題で収められているのだが、この版では欠損している。私の調査した限りでは熊褒の説話を取る他の版本には「済人沈困」の故事は見えないようである。あるいは欠けてしまった熊氏の祖先をめぐる逸話を補うために急遽「済人沈困」をいれたものか。熊大木は熊宗立の曾孫の代にあたる福鎮と同一人物といわれている。(7)

(甲2) 『新增圖像小学日記故事大全』十卷

〔蓬左文庫蔵 駿河御譲本〕

嘉靖四十五年(一五六六) 朝鮮四字堂錦溪刊本

卷頭に「小学日記序」として辛卯正月(至元二十八年(一二一九)) (8) 歴耕老農および弘治十年(一四九七) 管陶序。次ぎに「小学日記切要故事提綱」、「新增小学日記切要故事標目」。

建安草廬虞詡以成纂集、山陰用拙管陶廷鳴增校、臨川竹山胡琰廷玉圖像。

卷末に嘉靖四十五年 李義臣跋

上図下文 每半葉一圖、図右肩に四文字の題を記すものあり。巻一から巻十まで計三九二の故事所収。

巻末の李義臣の跋によれば、原書は唐本で己酉(嘉靖二十八年 一五四九)の春に初めて見たものを後にようやく入手し、嘉靖四十五年(一五六六)に朝鮮で謄写出版させたものである。刊行年こそ(甲1)より新しいが、原著者虞詡及び編者管陶の序文が付き、巻

末には「勤有書堂新刊」(9)という原本の刊記を残しているなど、原著の趣を最もよく伝え、しかも完本で伝わっている点でも貴重なものである。

(甲3)『日記故事』二卷

〔景照本 京都大学人文科学研究所蔵〕

嘉靖四十五年(一五六六)以後刊。

卷頭に辛卯正月歴耕老農「日記故事序」

卷末に嘉靖四十五年朱天球「刻日記故事序」

無図。卷上、卷下あわせて二五三の故事を収める。

朱天球は嘉靖二十九年の進士。官は山東醫學などを經て南京工部尚書まで至り、硬骨の人物としてその出身地漳州では現在も名高い人物である(10)。その序によれば山東省で杜学を興した時に小学書と日記故事を刻して頒布したものという。他の諸本が書坊による営利出版であるのと異なり、官刻または私刻による出版であるという点で、注目すべきものである。

(甲4)『鼎鰐校増評註五倫日記故事大全』四卷四冊

〔北京国家図書館蔵(16887)〕

萬曆癸巳(一五九三)鄭世豪刻本。

卷頭に「日記故事前序」萬曆辛卯吳懷贊、「新增評註詩聯

日記故事」萬曆癸巳吳宗札序。「日記故事詩聯目錄」

嶺南亞魁約菴吳宗札校増、武夷門人海東彭演評註、閩建書

林雲竹鄭世豪綉梓。

封面、目錄第一葉、卷四卷末欠。

半葉図数葉あり。上欄眉注。

(甲5)『鼎鰐校増評註五倫日記故事大全』四卷四冊

〔尊経閣文庫蔵〕

萬曆甲午(一五九四)鄭世豪(雲竹)刻本

封面は「鰐増評釋五倫日記故事大全」萬曆癸巳季冬鄭雲竹

綉梓

卷末木記は萬曆甲午歲孟春月鄭雲竹梓

收録故事数は三二二。

(甲4)と(甲5)は同版である。

收録されている故事の題名は他の日記故事が四文字であるのとは異なり、五文字である。絵図は半葉大のものが所々に挿入され図の上部に、故事の題目と同じ五文字の題がつけられている。書坊の鄭世豪(雲竹)は「書言故事大全」など多数の出版物が知られる。(11)

(甲6)『新刻京板全像釋註詳明初學日記故事』四卷二冊

〔お茶の水図書館成實堂文庫蔵〕

嘉靖十五年(一五三六)以後刊。

玉融梅塘我端毛五色釋纂、潭邑書林明台余象珍重刊

半葉図数葉あり。

これも巻首に二十四孝がついていない一本であるが、(甲1)から(甲5)(甲7)とは全く異なる版である。『新修成實堂文庫善本書目』には「正徳頃刊」とされているが、今回筆者の調査したところでは巻二に明の宗室の奇泳の故事が「孝順格天」と題して收録され、その中には嘉靖丙申(十五年)(一五三六)の出来事が記されている事から見ると、嘉靖以後の刊行

である。これも絵図は半葉大のものがいくつか入っており、上部に4字の題がついている。

(甲7)『新刊明解圖像小学日記故事』十卷二冊

〔北京国家図書館蔵(18741)〕

余氏西園堂刻本

巻頭に「小学日記序」辛卯正月歴耕老農および正徳十年

(一五一五) 管昉序。

上図下文 每半葉一図、巻一、巻八、巻十に落丁あり。

(甲2)と同じく原著者虞韶と増校者の管昉の序文がついてはいるが、管昉の序文の弘治十年が正徳十年に改められている。これは(甲2)の弘治十年のほうが正しい。収録する故事は(甲1)、(甲2)のどちらとも相違があり、異なる版である。余氏西園堂は元から明にかけて存在した建陽の書坊で現存する明代の刊本は6種あるとのことである。(12)

(乙) 巻首に二十四孝が付されているもの。

(乙1)『新刻標題二十四孝鳳毛日記故事』首一卷『新刻標題註釋出像鳳毛日記故事』四卷、

〔中国人民大学図書館蔵〕

万曆三十九年(一六一一) 忠慶堂余熙宇刻本

首巻に「巻之首」として二十四孝を付す。

江湖逸士完初子編輯、閩建書林余熙宇梓行

二十四孝部分 上図下文 每半葉二図、

日記故事部分、有図。収録故事数未調査。

忠慶堂余熙宇は建陽の書坊でこの他に一種の刊本が現存する。(13)

(乙2)『饒便蒙二十四孝日記故事』首一卷、『新鐫徽郡原板校正繪像註釋便覽賢日記故事』四巻

〔内閣文庫(367-73)蔵〕

万曆三十九年(一六一一) 黄正甫刻本

洪都詹應竹校正、書林黄正甫梓行。

二十四孝部分上図下文 每半葉二孝子。

日記故事部分、每一葉表又は裏中央上部に図。収録故事数一九七。

出版者の黄正甫は建陽の書坊、南宋の理学家黄華の子孫。(14)

(乙3)『饒便蒙二十四孝日記故事』一卷、『新鐫徽郡原板校正繪像註釋魁字便蒙日記故事』四巻

〔北京国家図書館蔵(16747)蔵〕

万曆四十二年(一六一四)刊。

卷末木記「萬曆甲寅孟秋月四有堂周氏靜吾編輯」

二巻巻頭に洪都錦城饒健環校正、閩建書林劉玉田梓行。

二十四孝部分 上図下文 每半葉二孝子、

日記故事部分、図有り。収録故事数二〇七。

劉玉田は喬山堂という書坊名でも多くの書を出版している(15) 建陽の書坊である。

(乙4)『新刊二十四孝故事』首一卷、『重刊日記故事』上下巻。

〔関西大学図書館蔵(長澤規矩也氏旧蔵書)〕

万曆四十四年（一六一六）刊

封面「官板全像日記故事」陳振崑重梓

卷末木記 萬曆丙辰年孟春月□□書林□□□梓。

上巻巻頭に南京御史山泉慎蒙發刊、書林□□□重梓とある。

二十四孝部分 上図下文 每半葉二孝子 日記故事部分、半葉おきに上図あり。収録故事数一四八。

(乙5)『新鐫類解官樣日記故事大全』七巻

〔和刻本類書集成〕第三輯所収

和刻本 寛文九年（一六六九）中尾市郎兵衛板行

封面「日記故事」忠恕堂詹敬菊梓

卷末木記 皇明萬曆新歲劉龍田精梓行

巻二巻頭に溫陵張端図校、書林劉龍田梓。

二十四孝部分 上図下文 每半葉一孝子。日記故事部分

各巻巻頭に半葉図あり。収録故事数三五五。

卷末木記に見える劉龍田は(乙3)の刊行者である

劉玉田の弟で嘉靖三十九年（一五六〇）の生まれ。卷末木記によればこれは萬曆元年の出版となり、二十四孝を巻頭に付す「日記故事」のうちで最も早期のものになるが、萬曆元年（一五七三）には劉龍田は一四才にすぎず、疑問が残る。兄弟とともに喬山堂の名で多くの書籍を刊行している（16）。校訂者の張端図は明末の魏忠賢の「閹党」の一派として名高い（17）。

(乙6)『新刻太倉藏版全補合像註釋大字日記故事』四巻、首
〔東大東洋文化研究所仁井田文庫蔵〕

閩建 劉君麗（近賢）刻本

首巻に「新鐫太倉註釋大字日記故事巻之首」として二十四孝を付す。

建寧府城我遷楊喬補訂、閩建書林近賢劉君麗續梓。

二十四孝部分 上図下文 每半葉二孝子 日記故事部分、每半葉左上隅または右上隅に図。収録故事数二〇七。

(乙7)『新刊徽郡原板校正繪像註釋魁字登雲日記故事』四

巻、首一卷
〔北京国家図書館（1986）蔵〕

首巻末「全像二十四孝畢」

巻一卷頭、昭陽臺山何胤宗校正、書林台南黃正選刊行

巻一卷末「天梯日記故事一卷終」

首巻はじめ二張（四頁）欠。巻四後半以下欠。

二十四孝部分上図下文每半葉一孝子、日記故事部分、每

半葉上部中央に図。

黃正選については徽州歙県の人とする説（18）と建陽の人とする説（19）がある。

(乙8)『日記餘芳故事』首一卷、上下二巻、

〔祐徳稲荷神社中川文庫蔵〕

〔国文学資料館マイクロフィルム〕

封面「日記餘芳故事」書林余奉軒梓

首巻に「新刻全像二十四孝日記故事餘芳巻之首」

巻上初めに「新鐫全像分類註釋餘芳故事巻上」雲間眉公陳繼儒較釋とある。

二十四孝部分 上図下文 每半葉二孝子。

日記故事部分 半葉おきに上部中央に図入り。収録故事数

一七五

校釋者とされる陳繼儒は明末の山人で、当時、多くの出版物に名を列ねた有名人であった(20)というが、ここでも宣伝のためにその名が使われたものだろう。

(乙9)『便覽聯輝日記故事』三卷

〔内閣文庫(367-2)蔵〕

封面 上付千家詩「日記故事」書林魏岐鳳梓
首卷に「便覽聯輝日記故事一卷」「至孝類」として二十四孝子をのせ、巻を改めずに「生知類」として「日記故事」の内容を続ける。

巻頭に毎半葉に四孝子図、二葉、計十六孝子図。上欄に附千家詩選として程明道ほかの七言詩を載せる。日記故事部分の収録故事数は一四八。

魏岐鳳は明代の建陽の書坊。(21)

(乙10)『新鐫龍頭全像註釋日記故事』四卷

〔関西大学図書館蔵(長澤規矩也氏旧蔵書)〕

羊城? 懷朱鼎臣編輯、武林書坊楊玉琳 梓行、「二十四孝類」として二十四孝子をのせ、巻を改めずに「生知類」として日記故事の内容を続ける。故事のみで五言詩無し。図は巻頭に半葉の舜の図、毎半葉上部中央に図。「日記故事」部分の収録故事数一三一。

編輯とされる朱鼎臣はこの書の他に『新刻音釋旁訓評林演義三國志史傳』『鼎鏤全相唐三藏西遊傳』など六種の刊本の編者として名が残されている(22)。羊城とは江西省臨川のことであるという(23)。

(乙11)『新刻詳註分類合像日記故事』四卷

〔陽明文庫蔵〕

封面「登雲日記故事」四知堂梓。

巻一に二十四孝

二十四孝部分 上図下文 毎半葉一孝子、日記故事部分半葉おきに上図入り。収録故事数一〇三。

四知堂については建陽の書坊に楊氏四知堂というものがあり萬曆三十九年の刊本があるという(24)。

(乙12)『重刻初願日記故事』四卷

〔尊経閣文庫蔵〕

封面 京板図像「日記故事」書林鄭夢齋刊

巻頭に「重刻初願日記故事序」嚶鳴山房

巻一に二十四孝。巻末に「全像廿四孝卷之一終」

巻二巻頭「西清堂初刻分類註釋合像日記故事巻之二」

二十四孝部分 上図下文 毎半葉一孝子

西清堂は建陽の詹氏西清堂のことかと思われ、嘉靖から萬曆にかけての出版物が五種現存することである。(25)

(乙13)『忠信堂四刻分類註釋合像初願日記故事』四卷

〔東大東洋文化研究所蔵〕

封面 註釋全像二十四孝「初願日記故事」忠信堂熊鹿台發兌。

(乙12)の再刻本と思われる。

巻頭に「四刻初願日記故事序」忠信堂主人識((乙12)の巻頭序文と同じ)

卷一に二十四孝、卷一卷末に「忠信堂四刻註釋分類全像廿四孝卷之一終」

卷二の首に「忠信堂四刻分類註釋合像初額日記故事卷之二」

二十四孝部分 上図下文 每半葉一孝子

日記故事部分 每半葉左上隅または右上隅に図入り。収録故事数一〇七。

(乙14)『新增註釋演說二十四孝故事』一卷、『新註便蒙演說日記故事』四卷

〔パリ国立図書館 Bibliothèque Nationale de France 蔵 (Chinois 3287) (26)〕

二十四孝部分 上図下文 每半葉一孝子

日記故事部分 無図。収録故事数一二九。

註釈部分が白話で書かれている点が注目される。

以上の刊本は文中に「皇明」という言い方が見られることなどから明代の刊本であることが明かであるが、以下の二種は清代に入ってから出版で珍しいものである。

(乙15)『新刻標題二十四孝大魁日記故事』、『新刻標題註釋

出像大魁日記故事』存二卷 ドイツ Wolfenbüttel Herzog

August Bibliothek 蔵 (27)

封面「名公日記故事」康熙十九年(一六八〇)刊

二十四孝部分 上図下文 每半葉二孝子

日記故事部分は每一葉の表または裏の上部中央に図入り。

図上部に四文字の題名あり。

(乙16)『増訂廣日記故事詳註』二卷 存一卷

〔東大東洋文化研究所倉石文庫蔵〕

江南城聚寶門秦狀元巷 李光明在刊

上巻巻頭「増訂廣日記故事詳註目錄」あり。

上巻はじめに「増訂廣日記故事詳註上巻」 鄺那王相晉升増註。下巻欠。目錄によれば二十四孝をふくめた収録故事数二三八。

まず至孝類として毎半葉に一孝子の故事及び詩、見開きの半葉に白下李石の署名入りの図像をのせて二十四孝を収録。次ぎに神童類として四十の故事、勤學類として二十五の故事をのせる。二十四孝部分以外は無図。

巻頭に朱文字で書店の広告文が載せられている。

最後に首巻欠落のため、二十四孝の有無を確認できなかったもの及び未見のものを掲げておく。

(丙) 首巻欠落のため、「二十四孝」の有無を確認できないもの。

(丙1)『増補引蒙日記故事』四卷(卷一欠) 黃氏刊本

関西大学図書館蔵(長澤規矩也氏旧蔵書)

巻三の首尾に「六刻引蒙日記故事」巻四の首に「六刻増

補引蒙日記故事」

(丙2)『新鍅重訂補遺音釋大字日記故事大成』殘四巻(巻

五、巻八)

〔東大東洋文化研究所仁井田文庫蔵〕

萬曆中熊氏□吾書舍刊本

(丁) 未見のもの

(丁1) 『新刊詳明日記大全』 存九巻

〔上海圖書館藏〕

明刻本 上図下文

金文京氏のご教示によれば序はほとんど欠けており、巻首の残存部分に「詔以成纂集」の文字が見える。

「二十四孝」はついでない。巻一前半残欠、図の右端に小題あり。

(丁2) 『新刊徽郡原板校正繪像註釋魁字天梯日記故事』 四巻

〔安徽省圖書館藏〕 (28)

周少葵刻本

昭陽 何胤宗 校

(丁3) 『日記故事』 存巻下 一冊

〔安徽省圖書館藏〕 (29)

万曆七年 (一五七九) 臨濠書舍刊

以上が現在までに所在を確認できた「日記故事」刊本である。この他にも題名に「日記故事」と言う文字を含む刊本はいくつか見受けられる⁽³⁰⁾が、虞韶の原著とは全く別のものなのでここでは触れない。

このリストを見渡しておよそ次のようなことが言い得るであろう。

(一) 現存する「日記故事」の刊本は、ほとんどが嘉靖年間以降のものである。刊行年が不明なものでも嘉靖以前の出

版と思われるものは無い。無論、嘉靖以前にすでに「日記故事」が刊行されていたことは後に述べる葉盛の『水東日記』巻十二の記述などから明かであるが、残念ながら現存するものは無い。

(二) 巻首に「二十四孝」を付した「日記故事」の出現は更に遅く、万曆以後と考えられる。

(三) 原著者の虞韶が建安の人であることもあって、以後も福建の書肆から発行されたものが多い。巻首に「二十四孝」を付けることも福建の書坊が始めたものであろう。

種々の材料から建陽の出版であると判断できるのは、甲の(1, 4, 5, 6, 7)、乙の(1, 2, 3, 5, 6, 9, 11, 12)の十三種で甲乙の半数以上を占める。(31)

(乙7)の黃正選(台甫)は建陽または徽州の書坊、(丁2)(丁3)も徽州の書坊の出版であると思われる。(乙2)(乙3)(乙7)がともに「徽郡原板」を謳うところから見ると、徽州版を原板とすることが商業的に価値有るものと見なされたようであり、徽州の書坊と福建の書坊との関係にはまだ解明されるべき点が多い。

(四)(甲3)を除いて他はすべて書坊による営利出版で、ほとんどは図入りの刊本である。現存する図の入っていない「日記故事」は(甲3)(乙14)(乙16)の三種のみである。(乙14)(乙16)は前に付けられた二十四孝部分は上図下文の体裁である。唯一、全く絵図のない(甲3)は官刻または私刻本と思われ、このほかにも私刻本として出版したと思われる記録⁽³²⁾も見られるが、現存するものは無い。

(五)「日記故事」に収録する故事にはそれぞれ出入りがあるが、編者によってかなり自由に取捨選択が行われたことがうかがわれる。現在調べ得た限りでは、収録故事数は最多の(甲2)の三九二から、最少の(乙11)の一〇三までという幅がある。(甲2)にしても編者によって故事の取捨選択が行われ、虞詡の原著のままではない。

(六)校訂や編纂にあたった人物はそれぞれ、かなりの教養を身につけた人物と思われるが地方志などに名の残る者は(甲3)の朱天球、(乙5)の張端図、(乙8)の陳繼儒のみである。後の二人は共に明末の有名人であり、書店が宣伝のためにその名を借りたものと思われる。その他の校訂者はどのような人物であったのか。一五世紀に入ってからさまざまな要因から生員が急増したことは何炳棣によって指摘されている(33)が、これらの、生員の資格を持ちつつ官途につくことのなかった士人たち(34)が校訂者であったと筆者は考えている。

(七)現在までに発見されたテキストから見る限り、清代に入ってから「日記故事」の出版は急速に減少したと思われる。その原因の一つとして考えられるのは、明末清初の戦乱および清朝の言論統制によって建陽の書坊が壊滅的な打撃を受け、衰退に向かったこと(35)である。ただ清代にも各種の塾で「日記故事」が使われていたことをうかがわせる記録がある(36)。しかしそれが虞詡の原著の流れを引くものであるかどうかは、現存するテキストが無いため確かめられない。

三 「日記故事」出版の背景

1 「日記故事」についての記録

現存する「日記故事」の刊本で出版年のはっきりしているのはすべて、嘉靖、万暦以降のものである。出版年の不明なものでも、それ以前にさかのぼると思われたい。しかし、もちろん嘉靖以前にも「日記故事」が出版されていたことを示す記録は存在する。

嘉靖以前で、「日記故事」に触れている記録を探ってみると、まず、時代の早いものとしては天順七年(一四六三)の春に痘瘡のため相次いで亡くなった太倉城南の沈氏一族の三人の幼子の墓誌である「沈氏三孺墓誌銘」がある。そこには八才で亡くなった男児について「慶生は生まれつき聡明で孝をわきまえており、日記故事数十首をそらんじていた」(37)と述べられている。ここでは「日記故事」が八歳の子供にとつて親しいものであったことに注目しておきたい。

次ぎに早いものが先にふれた葉盛の『水東日記』巻十二の記事である。

「書坊の出版する物語で流通しているものは多いが良いものは少ない。ただ建安の虞詡、以成の日記故事はひとえに楊文公と朱晦庵の遺訓を主としている。(中略)近年、襄城の李公が此の書を重刊している。(後略)」(38)

葉盛は成化十年(一四七五)に五十五才で卒しているから(39)、成化以前に重刊された「日記故事」があったことになる。残念ながらこの記述からは当時の刊本が挿し絵を伴って

いたかどうかはわからない。

今、我々が確実に言えることは嘉靖期に入つて、建陽の書坊から出版された挿し絵入りの「日記故事」が多数現存するということである。

それではこれらの挿し絵入りの「日記故事」の購買者はどのような人々であつたのか？

嘉靖期に入ると女性が「日記故事」に親しんでいたことを示す記録が二篇見られる。

一つは朱制の「榮壽慶辭」で莆田の黃道卿の母親の六十才の誕生日を祝う文中で、「下のものを慈しみ、四人の子供達を等しくよく育て、衣服は問うまでもなくその出処を知つてゐた。よく『小学日記故事』を子供達に語り教え、女性の客が来ると必ず朗誦して解説させた。」(40)とその賢母ぶりを讃えている。

もう一つは唐順之の「盛孺人墓誌銘」で、居庸山人顧存仁の妻で嘉靖二〇年(一五四一)に卒した盛孺人を讃える文章の中に「孺人は若いときから小学や孝経の書を読み、よくその教えを理解していた。普段から書を好みはしたがただ仏書は好まなかった。家事の合間には『小学日記故事』や小説を読んで解説を加え、古人の偉大な行いに触れるたびに手を打つて、烈士たるものはこのようであるべきだと感嘆した。」(41)とある。

一章のリスト(乙4)の版本が明らかに女性の読者をも対象として編纂されている(42)ことから見て、『日記故事』は女性にも多く読まれたことがうかがえる。

これらはすべて上層の知識階級の例であるが、下層の庶民にとつても「日記故事」は身近なものであつた。明代に広く行われた小学教育の機関、社学で教科書として用いられたことを示す記録がいくつかある。

嘉靖十四年以前に作られたと見られる黄佐の『泰泉郷礼』巻三の「郷校」には社学の内容が詳しく述べられているが、そこでは晩學の課業として礼儀を習ひ、早學で読んだ書の復習をすることをあげた後に次のように述べている。

「この後五日に一回、朱子小学及び日記故事の内の古人の嘉言善行の一段を教える。たとえば黃香扇枕、陸績懷橘の類を、口語で説き聞かせ静かに聞き入らせる。」(43)

嘉靖期の社学と「日記故事」のつながりを示すもう一つの資料は酒井忠夫氏が紹介された『聖訓演』巻中に見える巡按陝西監察御史唐錡の案驗である。(44)

『聖訓演』は太祖の六言の演解書で三巻から成り、嘉靖十六年の唐錡の後序が付いているところからそれ以後のものといわれる。その中巻は巡按陝西監察御史唐錡が監察の結果見出した鄉村政治の弊を指摘し、それを受けた蒲城儒備学教諭の解が載せられている。

『聖訓演』中巻の冒頭、監察御史の案驗の部分ではまず、洪武三十一年(一三九八)の「教民榜文」で定められた太祖の六言を木鐸老人に叫喚させる制度が、このころになると形骸化してしまつたことを指摘し、あらためて仕事を真面目に行う人物を選んで木鐸老人に任命し、望日と朔日に訓諭させるべきことを説いたあとに、木鐸の訓諭とともに重要なこと

として社学での童蒙への教育をあげ教誨（社学の教員）を各郷に派遣して教誨させるとともに、声のよくとおる児童六名を選んで「訓諭註解」を朗誦させる。月の十五日には木鐸老人と共に各郷で、一日には城内に赴き童生とともに役人の前で「訓諭註解」を項目ごとに大声で朗誦させる。役所のすべての正規の人員と城内の坊廂の老幼のものは月台の下の左右に立って静聴する。そして「日記故事」「為善陰隲」「孝經」「小学」から倫理に関する項目を徳目ごとにあげて講義すればというものである。(45)

この記述は「日記故事」が社学において用いられたことを直接に示すものではないが、社学の学生にとって「日記故事」が身近なものであった事を示している。

また前章であげた（甲3）の嘉靖四十五年の朱天球の「刻日記故事序」に「予は山東省に至つて社学を興作し、まず小学の書の善なるを購入し、刻してこれを頒布した。また日記故事の書を取りその誤つた文字を正して重刻して頒布した」(46)と述べていることも、例証となるであろう。

このほか、『萬曆續溪渠志』七にも社学の教材として「日記」「故事」なるものがあげられているという。(47)

2 社学について

社学は元の至元七年（一二七〇）に頒布された「農桑之制十四条」に始まるといわれる(48)。元では五十家を単位とする「社」という単位が設けられ、各社に一つの学校が設けられた。しかしその実態がどのようなものだったかについて

では、まだ明かで無いことが多い。明の太祖はこの制度を引き継いだのである。以下、これまでの研究(49)によりつつ、明代の社学の概況を述べる。

明代に国家が正式に社学の設立に言及したのは明初の洪武八年の太祖の命令に始まる(50)。これを受けて同年二月には礼部は全国に各府、州、県に社学を五十家に一カ所ずつ設立するようにとの通知を発した。五百余種の明清の地方志を調べると、洪武八年に成立した社学の数は二一五五という突出した値を示しているという(51)。しかし地方官が金をとって生徒を集めたりする弊害が続出したため、洪武十三年ころまでに、この方針は変更され社学は一旦廃止された。然し洪武十六年には太祖は再び社学の復活を命じ、ただし官吏は関わってはならないとして、教育を完全に民間にゆだねた(52)。この二年前、洪武十四年には里甲制が確立したことがこの社学復活の原因の一つであると思われ、以後、社学は各里に一つ設けられた(53)。さらに洪武十八年から十九年にかけて「御製大誥」「同統編」「同三編」を發布し、洪武二十四年には、大誥を民間の子弟に講読させ、社学において教え、三年後には教師は生徒を率いて礼部に至り、暗誦させ、その出来の善し悪しに応じて賞を与えるべきことが定められた(54)。洪武三十一年には「教民榜文」が發布されて、里老人、木鐸老人の制が定められた(55)。「教民榜文」第十八条には太祖の「六言」（孝順父母、尊敬長上、和睦鄉里、教訓子孫、各安生理、母作非為）を毎月六回、木鐸老人に叫喚させるべきことが定められた(56)。しかしこれらの定めは、末

端では実行されず、空文化していったらしく、永楽から宣徳年間（一四〇三〜一四三五）に新設された各地の社学の数は、五百余の地方志の記録を調べても三十余りしか見つからないという（57）。正統年間（一四三六〜一四四九）には提学官の管轄範囲に社学が含まれるようになり、社学は国家の管理のもとに置かれるようになりはしたが、実際に設置される数はやはり少なかった。明代の各種の小学が隆盛に向かうのは弘治年間以降のことである。

『中国教育制度通史』第四卷二七二頁にみえる吳宣德氏作成の表「明代小学の地域分布」を以下に示す。この表は、家塾、私塾、蒙館、義学、社学などの児童教育機関の総称としての「小学」についての統計であるので、社学の動向を正確に反映したものとはいえないが、弘治期から万曆期にかけて各地の「小学」が急速に増大したことがわかる。

次に明代の社学の具体的な姿を王蘭蔭の研究などからうかがってみる。

社学は都市部だけでなく農村にも多く設けられたという。王蘭蔭の統計によれば所在地のわかる三八三七の社学のうち、郷の社学は七三%強、城の社学は二六%強であるという（58）。

教師は一社学について二人から二人で、国子監生、生員あるいは退職官吏を当て、教師の待遇としては差役、徭役を免ぜられるほかに穀糧や修金を給せられる、官に没収された土地の耕作権をあたえられるなどさまざまなであった。学生については多くは民間の子弟で優秀な者という以外の制限は無

備注	合計	不詳	揚州	天啓	万曆	隆慶	嘉靖	正徳	弘治	成化	天順	正統	宣徳	本朝	洪武	明代	
1 建文、洪熙、泰昌の明代は短期であり、記録も見えないので省略する。	815	365	1		105	1	126	81	115	10	1	8			2	北京	
2 後の時代の小学の数の中には前の時代の学校の基礎の上に再建、改建、増建された学校数も多く	4504	709	2	13	120	4	165	229	43	76	69	2	151	2	2919	南京	
3 蘭陽中の「北京・南京」は南北直隸を指す。その他は各承宣布政使司を指す。	437	207			46		57	3	46	76	1		1			山西	
	897	211	1		312	1	115	2	33	4	4		75		139	山東	
	578	115	1		11		124	18	120	62	1	109		12	5	河南	
	375	306			9	1	10		46	1				2		陝西	
	833	329	2		99	4	188	7	19	118			1	11	55	浙江	
	518	126	1		39	9	69	55	20	5	184	2		8		江西	
	795	321			142	6	100	6	49	112	1	1	1	3	53	湖廣	
	160	78					77	2	2	1						四川	
	1384	59			56	2	255	17	738	5	137	1	68	3	3	福建	
	958	84			108		561	8	2	193	6			6		廣東	
	98	56			5		24	1		2						廣西	
	169	80			8	1	71	1	4	3				1		雲南	
	81	27			13	2	36		3							貴州	
	12612	3123	8	13	1073	31	1978	430	1240	668	404	6	412	4	29	3193	合計

く、入学生の年齢は七、八歳から十五歳でとくに厳格なきまりはなかったという。女子の入学が認められたかどうかについては資料が無い。学費は、財政的に豊かな社学は学費を徴収しないばかりか紙筆油などを支給する場合もあった。財政的に不足する社学でも富者の子弟のみに学費を納めさせ、貧

しい子弟には学費を免除し、さらに米粟紙筆などを支給する
 社學もあつた(59)。卒業後の進路については正統元年以降、
 社學での成績が優秀なものは儒學へ進み科挙受験をめざすこ
 とができるようになった。しかし、儒學の定員が限られてい
 たので、社學を終えた後は家に帰る學生が大多数であつた
 (60)。すなわち、社學は事実上、科挙の受験を目的としない
 庶民階層への教育をも担つていたことがわかる。

四 結論

「日記故事」の現存する刊本で、嘉靖、万暦期のものが多い
 ことと、前出の表での小学の数の動向との間には関連が
 ある。嘉靖期以前の刊本が現存しない理由については別に
 考えなければならないが、嘉靖期以降、「日記故事」の諸本
 は、社學をはじめとする各種の「小学」での教科書として広
 い購買層をもつていたことが言えるであろう。ただ、教科書
 といつても一人一人の生徒が書物を購入できたとは考えにく
 い。教師が所持する一冊の「日記故事」をその挿し絵を示し
 つつ教師が語り聞かせたのであろう。「泰泉郷礼」や「聖訓
 演」の例では社學の教師や役人がこの書の内容を口語で語り
 聞かせていたことがうかがえるが、(乙14)の刊本の注釈が
 白話で書かれていることもそのような事情を反映していると思
 われる。

万暦以後に「日記故事」に「全相二十四孝詩選」が合綴さ
 れるようになったのも、より幼い年齢の子供に向けた初級段
 階の教材が必要とされたためと考えられる。「日記故事」が

社學に学ぶ八歳から十五歳程度の生徒を対象としていたとす
 れば、それ以前に家庭で教育を受ける幼い子供への教材とし
 て二十四孝のような親孝行を説くものが適当とされたのであ
 る。このことは「日記故事」が小学での教育に留まらず、
 家庭内での教育にも広く用いられるようになったことを示す
 ものかもしれない。

「日記故事」は社學に学ぶ八歳から十五歳程度の生徒達や、
 上層の家庭の女性や子供達といった初學の人々を対象とした
 道德教化の書として福建の書坊をはじめとする営利出版業者
 によつて何種類も出版された。中国全土のみならず、日本など
 の外国にまで輸出されたのも、絵入りの道德教訓書であるこ
 とが児童教育の書として役立ったからであろう。

さらに飛躍した推測が許されるなら、元代に作られた虞紹
 の「小学日記故事」、郭居敬の「全相二十四孝詩選」も、元
 代の社學または家庭内の教育で使うことを目的として編まれ
 たものなのではあるまいか。

建陽、徽州の地でこれらの書が盛んに出版されたのもこの
 両地が朱子學の伝統を色濃く受け継ぐ土地であつたからであ
 る。

明末の白話小説や戯曲をはじめとする出版業の繁栄の前提
 としては、一五世紀に入つてからの生員の増加にともなつ
 て、出版業や社學の教師といった職業につく士人が増加した
 こと、さらにその前提として、社學で教育を受けた庶民の識
 字層の増大があること、を考える必要があるのではあるまい
 か。

注

- (1) 後出の(甲2)刊本にみえる歴耕老農(虞韶)の序文では「小学日記」とのみ称するが、巻一卷頭では「新增図像小学日記故事大全」となっている。「故事」の名を付け加えたのは書坊であろう。
- (2) (甲2)刊本所収の歴耕老農「小学日記序」。楊億のこの言葉は『小学』嘉言第五にも引かれ、それによって広まったと思われる。
- (3) ①橋本草子「全相二十四孝詩選」と郭居敬「人文論叢」四三号 平成七年一月
②『孝行録』と「全相二十四孝詩選」所収説話の比較「(人文論叢)」四四号 平成八年一月
③「日記故事」の版本について「(人文論叢)」四六号 平成一〇年一月
- (4) 張志公『伝統語文教育教材論』(上海教育出版社 一九九二年)八四頁、二一五頁に引かれる芝蘭室刊『分類注釈初級故事』、康熙刊尺木堂本など。徳田進『孝子説話集の研究』(井上書房、昭和三八年三月)の中世篇研究資料目録中国の部二三に見える『六刻増補注釈合像引蒙日記故事』など。
- (5) 謝水順、李挺『福建古代刻書』(福建人民出版社 一九九七年)二九二頁～二九五頁
- (6) Lucille Chia "Printing for Profit" (Harvard University Press 2002) P. 167
- (7) 注5所引書 二九三頁。
- (8) この年代については注3所引論文③参照。
- (9) 大澤顯治「啓蒙と学業のあいだ」(『東洋文化研究』第七号 二〇〇五年三月)に洪武四年金陵王氏勳有書堂刊「魁本対相四言雜字」(京大工学部建築図書室蔵)なる書物が紹介されており、その複製本(大正九年七月 米山堂)によれば表紙に「洪武辛亥孟秋吉日金陵王氏勳有書堂新刊」の文字がみえる。なお『明代版刻綜録』にはこの「四言雜字」のほかに二種の書が金陵王氏勳有堂の名でみえている。この書の原本も金陵の書坊により出版されたものか。
- (10) 崇禎「漳州府志」巻二十一
中国人民政治協商會議漳州市委員会のホームページ
- (11) 注5所引書 三〇六頁～三一〇頁
- (12) 注6所引書 P. 301 Table B. 5 の 275
- (13) 注6所引書 P. 300 Table B. 5 の 256
また注5所引書 二六〇頁
- (14) 方彦寿「同人物対建刻发展的影响」(『福建论坛』一五巻二期一九八八年四月)
- (15) 注5所引書 二七七頁
- (16) 注5所引書 二七六頁～二七七頁
- (17) 『明史』巻三八八、文苑四。巻三〇六、閩黨
- (18) 劉尚恒『徽州刻書与藏書』六九頁
- (19) 注6所引書 p. 288 Table B. 5 の 47
- (20) 大木康「山人陳繼儒とその出版活動」(『明代史論叢』下 汲古書院 一九九〇年三月)

- (21) 注6所引書 p.293 Table. 5 の 128
- (22) 金文京「朱鼎臣輯本新刻音釋旁訓評林演義三國志史傳前言」(三國志演義古版叢刊五種「朱鼎臣輯本三國志傳」中華全國圖書館館縮微複製中心 一九九五年)
- (23) (英) 魏安「三國演義版本考」(上海古籍出版社 一九九六年) 一一三頁～一二四頁
- (24) 注6所引書 p.297 Table. 5 の 207
- (25) 注6所引書 p.304 Table. 5 の 303
- (26) 大澤顯浩氏にコピーをいただいた。
- (27) 注26に同じ。
- (28) 『中国古籍善本書目』子部 10024 による。
- なお、周蕪『徽派版畫史論集』(安徽美術出版社 一九八五) 図九—一〇では『天梯日記故事』存三卷、一冊とある。
- (29) 周蕪『徽派版畫史論集』図七一八、張國標『徽派版畫藝術』(安徽美術出版社 一九九六) 九一五頁
- (30) 大澤顯浩「『鼎鏤國朝史記事實類編』評釋『日記故事』解題」(『東洋文化研究』七号 二〇〇五年三月) に紹介される『鼎鏤國朝史記事實類編』評釋『日記故事』、『學堂日記故事圖說』(『宝卷』初集第三十九冊所収) など。
- (31) なお、注6所引書の二三五頁では現存する建陽刊の『日記故事』が十一種ほどであるとされているが、書名が挙げられていないため、ここであげた十三種とどこまで重複しているのか確認できない。
- (32) 四庫全書所収『山西通志』卷百四十四 孝義四に郭紀偕の弟縉が善行によつて旌表され、その子の昇が日記故事を刊行して世に行われたとの記述がある。また『明代版刻綜録』卷一には申安刊『日記故事』二巻が著録されているが申安は嘉靖の舉人で真定の知府を勤めた人物という。
- (33) 何炳棣 寺田隆信・千種真一訳『科學と近世中国社會』(平凡社 一九九三年二月)
- 第五章 社會變動に影響する諸要因 試験と官立學校
- (34) 酒井忠夫『中国善書の研究』上(國書刊行會 一九九九年二月) 第二章、一 郷紳・士人の用語
- (35) 注5所引書、第四章第一節「清代建陽坊刻的衰微」
- (36) 大澤顯浩「『啓蒙と學業のあいだ』」(『東洋文化研究』第七号 二〇〇五年三月) に紹介されている瞿中溶「二十四孝考」の道光十五年(一八三五)の序文、余治「得一録」卷十之三所収の「義學章程」その他。
- (37) 鄭文康『平橋藁』卷十四
- (38) 「性聰慧且知孝。能誦日記故事數十首」葉盛『水東日記』卷十二
- 「故事書坊印本行世頗多。而善本甚鮮。惟建安虞詡以成日記故事以為一主楊文公朱晦庵之遺意。(中略) 近歲襄城李公重刊此書。(後略)」
- (39) 「明史」卷一七七列伝六五
- (40) 朱澗『天馬山房遺稿』卷三

「慈惠遠下、淑均四子、襟裾不問、可知其所出。能言口授以小学日記故事、女賓至、必令朗誦講解。」

(41) 唐順之「荊川先生文集」卷十五

「孺人自少讀小学孝經書頗解意旨、故平生喜書。然獨不喜佛書。中饋有間、則取小学日記故事、稗官小說、家語說之。每至古人壯節偉行、則擊手詫嘆、以為烈士當如是。」

(42) (乙4) では卷末に「子道類」「女道類」「婦道類」「妻道類」の四つの女性に関する標目が付け加えられている。

「善行一段、如黃香扇枕、陸績懷橘之類、直白說之、令其靜默諦聽。」

(43) 黄佐『泰泉鄉禮』卷三「學校」

「自後五日一次、教以朱子小学及日記故事內古人嘉言善行一段、如黃香扇枕、陸績懷橘之類、直白說之、令其靜默諦聽。」

(44) 注34所引書 六五頁、六九頁、七九頁

(45) 『聖訓演』卷中(蓬左文庫藏)

「然木鐸但可訓諭而蒙養則係於社学、二者固相表裏也。仍選教讀分授各鄉訓誨、各選蒙童聲音洪亮者六名、將訓諭註解熟讀朗誦。望日各同木鐸在鄉、朔日同城中童生赴有司。訓諭註解逐款高聲誦說。在官一應點卯人役及坊廂老稚、分立月臺下、左右靜聽。仍將日記故事、為善陰陽、孝經、小学、各摘數条有關倫理者、以類相附講論。各鄉俱照舉行。(後略)」

(46) 朱天球「刻日記故事序」

「予至東省興作社学、既購小学書善刻頒之、又取日記

故事之書正其訛字重刻以布。」

(47) 王蘭蔭「明代之社学(統前二十一期)」「(師大月刊)二十五期一九三五年」第十二教材篇(7) 其他

(48) 『中国教育制度通史』第三卷(喬衛平 山東教育出版社 二〇〇〇年七月) 五三四頁、五三五頁

(49) ①王蘭蔭「明代之社学」「(師大月刊)二十一期一九三四年」

②王蘭蔭「明代之社学(統前二十一期)」「(師大月刊)二十五期一九三五年」

③松本善海「明代之社学」「(歴史教育)十一卷五、六、七号。昭和十一年八、九、十月」

④五十嵐正一「中国近世教育史の研究」(国書刊行会昭和五十四年三月)

⑤『中国教育制度通史』第四卷(吳宣德 山東教育出版社二〇〇〇年七月)第四章「明代的小学」

(50) 『明太祖實錄』卷九六、洪武八年正月丁亥

(51) 注49の⑤書 二六五頁

(52) 『明太祖實錄』卷一八二、洪武十六年十月

(53) 従つて名称も「里學」とすべきところであつたが、元代以来の名称をそのまま踏襲したというのが注49の

③論文に見える松本善海氏の説である。

(54) 『明太祖實錄』卷二二四、洪武二十四年十一月己亥の条に「命賞民間子弟、能誦大誥者。先是上令天下府州県民、每里置塾、塾置師、聚生徒、教誦御製大誥、欲其自幼知所循守、閏三歲、為師者、率其徒、至

礼部背誦、視其所誦多寡次第、賞之。」とある。また卷二五三、洪武三十年五月己卯の条には「天下講読大誥師生、來朝者凡十九萬三千四百餘人。並賜鈔遣還。」とある。

(55) 松本善海「明代における里制の成立」(『東方學報』

(東京) 第十二冊之一 昭和十六年五月) の註12参照。

(56) 『皇明制書』上卷所收「教民榜文」第十八条

「每鄉每里、各置木鐸一箇、於本里内、選年老或殘疾不能理事之人、或瞽目者。令小兒牽引、持鐸循行本里、如本里内、無此等之人、於別里内選取、俱令直言叫喚、使衆聞知、勸其為善、毋犯刑憲、其詞曰孝順父母、尊敬長上、和睦鄉里、教訓子孫、各安生理、毋作非為。如此者每月六次、其持鐸之人、秋成之時本鄉本里内、衆人隨其多寡、資助糧食。(後略)」

(57) 注49⑤書 二六七頁

(58) 注49①書 八〇頁

(59) 注49②書 一〇八頁〜一〇九頁

(60) 注49⑤書 二七八頁